サイエンス・エッセイ

電子心母

代表取締役　吉田　隆

第3話
ロマンチック・サイエンス（1）
物語る人々

●私が住む常盤平界隈は、春の訪れとともに何かしらざわめきが増す。

私たちは春暖に浴しながらも、このざわめきが陽気に浮き足立つ人々の足音なのか、木の芽が膨らんで若葉が茂るいわば春の足音なのか、普段気を回すことはない。だが、常盤平駅から5つ目の松戸駅で、私鉄からJR線に乗り継ぎ、ホームで上野行電車を待つ間に出会ったざわめきは少々趣を異にしていた。

●その日、一人の若い男性がホームの端に立っていた。

駅員と並んで電車の進入を待つ彼の様子に、何となくざわめきの予感を覚えた。やがて進入してくる電車にまず反応を示したのは、駅員ではなく彼の方だった。

駅員と並び、大声で電車を誘導するジェスチャーを見れば、先輩が新米駅員を訓練しているかのようにカン違いもする。だが、駅員が明らかに彼を無視して、事務的に乗降客の整理を始め、彼がそんな状況とは無関係に同じジェスチャーを繰り返すのを見るうち、やがて事情が呑みこめた。彼はある種の発達障害を患っているようだった。自分の意志と無関係に運動チックや音声チックが表れ、パーキンソン病などと同様、脳内の神経伝達物質の異常によると言われるトゥレットと呼ばれる症状ではないかと私は想像した。

駅員に成り切る真剣さには近寄りがたい威厳を漂わせていた。そっと彼の横をすり抜け車両に乗り込みざま、奇声が耳に飛び込んできた。すぐにドアは閉じ電車は走り出したが、私の耳にその声の余韻が残り続けた。そしてすぐに、甲高いだけの意味不明に思える言葉から、「電車が入ります！気をつけて下さい！次はX駅です！」という意味が判読できた。

●15年前、'ロマンチック・サイエンス'という言葉を知った。

日刊紙の書評で目にした『妻を帽子とまちがえた男』の中で、著者である神経学者O・サックスがロシアの神経心理学者A. R. ルリアの言葉として紹介した。ルリアは分析を主とする還元主義的な科学から叙述を主とする総合的な科学への復帰に情熱を傾けた。患者のあれこれを分析するのではなく、見たままを具体的に物語として記述することで適切な理解と看護法が見出せると考えた。そうした臨床研究を通じ、神経症の患者が想像を超えるアイデンティティの物語を生きていることを明らかにし、その科学的なものとロマンチックなもの、事実と夢のような話とが交錯する領域を好んで'ロマンチックな科学'と呼んだ。それをサックスが'ロマンチック・サイエンス'と定義付け、'物語の科学'あるいは'具体性の科学'とも呼称した。ちなみに、サックス先生はロバート・デ・ニーロ主演の映画『レナードの朝』の原作者でもある。

●さて、駅員を模倣（ミメット）することそれ自体は病的な行為ではない。

ゴッコ等の模倣遊びは子供の成長に不可欠であり、社会の一員になるための通過儀式ともいえるだろう。彼に病的なものを感じるのは、その行為を通過したはずの大人だからである。彼はもはや大人なのになぜ人前を意識することなく模倣を演じるのだろうか？'物語'や'模倣'は人のアイデンティティにとって何を意味するのだろうか？私は迂闊にも彼を見た目のまま判断した。しかし、彼の内面は混沌にあるのではなく、模倣することにより彼なりに秩序ある心豊かな世界を生きている。見た目で考える姿勢だけでは、その豊かさが見えにくいのである。裏を返せば、ロマンチック・サイエンスとは対象を見る立地点を変えようとする科学とも言える。

（参考引用文献）
1）「妻を帽子と間違えた男」（オリバー・サックス著　晶文社　1992年）

◉編集後記

甘いお菓子で飲むお茶といえば、コーヒー、紅茶に煎茶といろいろあるけれど、沢庵、きゅうりのおしんことなるとやっぱり煎茶。最近はペットボトル飲料も普及し、愛飲する若者も増えているという。でもやっぱり、適温に冷ましたお湯で、じっくりと入れて味わう煎茶の味と香りは格別だ。ちょうど今月号の原稿を書き終わった後のショッピングで購入したもの、抹茶アイスに、抹茶入りのフェイシャルパック。顔に緑色のパック剤を塗って鏡に向かってニヤニヤしている単純な私。明日はきっとより美人になっているハズ‥（笑）。（あしだ）

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755　東京都文京区湯島2-16-16　㈱エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX：03-3814-9152　E-mail：eigyo@nts-book.co.jp

NTSニュース
2007年5月号（通巻99号）
2007年5月8日発行